

あとがき

編者はギッシングの没後百年（二〇〇三年）に記念事業として『ギッシングの世界——全体像の解明をめざして』（英宝社）という論文集を出版したが、その時と同じように二〇〇七年の生誕百五十年記念となる本書でも、多くのギッシング研究者に協力していただいた。特別寄稿を依頼したのは、『ギッシング・ジャーナル』編集長でギッシング研究の泰斗ピエール・クステイヤス氏、編集委員会メンバーのジェイコブ・コールグ氏とパウア・ポストマス氏、『ギッシング選集』（全五巻、秀文インターナショナル）の責任編集者で日本のギッシング研究を先導された小池滋氏、文学理論や現代思想のみならず歴史研究にも造詣が深い富山太佳夫氏、そしてヴィクトリア朝の出版事情に詳しいクレアム・ロー氏の六名であった。

特にクステイヤス氏には今回もまた一方ならずお世話になった。後期ヴィクトリア朝だけでなく現代においても喫緊事である平和主義の章に加え、序章の「ギッシング小伝」まで書き下ろしていただいた。質問魔と化した編者のメールに対して、いつも即座に返事をくださったり、索引にリストアップした雑誌や出版社の存続期間など、編者の手に余る問題を幾つも解決してくださった。本書が曲がりなりに生誕百五十年の記念すべき年に間に合ったのは、クステイヤス氏の支援と激励があったから

である。一昨年、クステイヤス氏は分厚い注釈付きギッシング文獻目録の決定版を上梓されたが、これまでに氏が出版されたギッシング関連図書の数枚挙にいとまがなく、その多くは研究者必携の文獻となっている。今回の論文集によって、長年にわたるクステイヤス氏の学術的貢献と氏から受けた恩義に報いることができればと、心から願わずにはおれない。

実は、クステイヤス氏は生誕百五十年のためにギッシングの伝記を準備しておられたが、残念ながら目の病気ために中断を余儀なくされた。しかし、その病も癒えて、現在は一八九七年の項目を執筆中だとうかがっている。ギッシングの百十五の短篇小説を収録した全集も準備が着々と進んでおり、ここ数年の間に伝記とともに出版されることであろう。また、二〇〇八年の三月二十三日と二十四日には、クステイヤス氏が長年にわたって奉職されたフランスのリール大学で、かつての同僚クリステイヌ・ユゲ氏の主宰による第三回国際ジョージ・ギッシング大会が開催される。テーマは「他者を書く——ジョージ・ギッシングの想像力の経路」である。これは四年に一度の国際大会であるが、とある理由で第三回は一年遅れてしまった。従って、実際にギッシング生誕百五十年の二〇〇七年における記念事業は本書だけである。戦前戦後の日本におけるギッシングの受容と人気を考えると少し寂しい気もするが、この記念論文集によって再度この作家の漂泊の魂をよみがえらせることができれば、編者としては望外の幸せである。

本書のプロジェクトが発足したのは二〇〇五年の夏であった。編者はヴィクトリア朝の文学研究で目覚ましい成果を挙げられておられる十八名に参加を呼びかけ、適材適所を考えてテーマの割り振りをした。『階級にとりつかれた人びと』（中公新書）の著者、新井潤美氏には「階級」の章といった具合に、メンバーの大半には各自が専門とされるテーマの章を担当していた。幾つかの残ったテーマの章は若手研究者に引き受けてもらったが、有能で馬力のある方ばかりを選んだだけあって、どの章も力作となった。有能で馬力のある若手は、どんなテーマであれ、十分な結果を残すことができるということを今回あらためて実感した。そして、専用に立ち上げたメーリング・リストを通して、十八名の執筆者には統一事項などの確認をしてもらった。各章の原稿は完成したのから順次、全員が読めるように専用のウェブ・サイトに置いたので、参加者は内容的な重複を避けることができたはずである。それから、「社会」、「時代」、「ジェンダー」、「作家」、「思想」のそれぞれの部に所属する者同士で形式面・内容面の相互チェックをしていた。最後に、科研の出版助成に申請した後の半年間、編者が表記の統一などを施したので、結果として読みにくい箇所が生じておれば、それはすべて編者の責任である。

さて、ギッシングの生誕百五十年に執筆者の一人、村山敏勝氏の急逝について触れなければならぬのは、編者として断腸の思いである。出版助成申請の一ヶ月ほど前のことだったが、

二〇〇六年十月十一日（水）、彼は三十八歳の若さで逝ってしまった。十月七日（土）に東大駒場キャンパスで開催されたジョアン・コプチェクの講演会でラウンド・テーブルの司会をする予定であったが、当日の朝早く倒れて意識が戻らなかった。村山氏の急逝の原因は異邦の地で不帰の客となったギッシングと奇しくも同じ肺の病である。生者必滅、会者定離と言うが、四十六歳で世を去ったギッシングの年齢を考えても、八面六臂の活躍をされていた村山氏の夭逝には、ただ暗涙にむせぶばかりである。クイア理論をはじめ多方面で業績を残しておられた村山氏であるが、研究のパノラマが実に広く、編者が今回の企画で最後に残った難物のテーマ「科学」の担当を依頼した時も、彼は「いいですよ、ギッシングは好きだから」と言って快諾してくれた。ギッシングの科学への不信を通して当時の生物学の展開を考察した第六章は、彼の該博な知識に裏打ちされた説得力のある論考であり、本書の中でも特に異彩を放っている。本書に寄稿した日本人研究者のほとんどは、村山氏の恩師、ディケンズ・フェロウシップ日本支部の仲間、ヴィクトリア朝研究会の同志であるが、彼の急逝によって暗夜に灯を失った思いに打ちひしがれている。本書で扱った様々なテーマのほとんどに通暁していた村山氏は、深い学識による心の豊かさという点で最もギッシングに近い教養人であった。編者は、この機会を利用して次回もまた同じ仲間と一緒に、今度は別の作家を取り上げて前期、ヴィクトリア朝の社会と文化を多面的に考察した

いと考えている。それが村山氏への追善供養になると信じているからである。今はただ安らかに村山氏の霊が瞑せられんことを祈りたい。

末尾になって恐縮だが、ギッシング生誕百五十年の記念事業として、文学研究の立場から後期ヴィクトリア朝の時代精神と社会風潮を複合的に捉え直し、この時代の新たな全体像を構築しようとする本書に価値を見出し、出版の機会を与えてくださっただけでなく、懇切な配慮と助言までいただいた溪水社の木村逸司社長に、そしてレイアウト指示や図版処理で迷惑をかけたしまった同社の木村斉子氏に、心より御礼を申し上げます。

なお、本書は独立行政法人日本学術振興会平成十九年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けた。ここに記して深謝の意を表す。

二〇〇七年六月二十八日

編者